

悲しみの仕事に費やされた時間・・・阪神淡路大震災から17年



6000人以上の命が奪われた阪神淡路大震災から17年目の朝、NHKテレビ「あさイチ」で、娘さんを失った父親が紹介され

た。自ら傷を癒す人の心の軌跡を見た。

寺田孝さん（72歳）は震災直後に娘の弘美さん（当時30歳）のアパートに駆けつけたが、建物は無残にも崩れ落ち火に包まれ為す術もなかった。「救ってやれなかった」という激しい罪の意識にさいなまれた。弘美さんが5歳の時に離婚し、男手一つで育てあげたが、二十歳になったときに弘美さんが一人暮らしを望んだ。「あの時、無理にでも止めておけば」と悔やんだ。一周忌を終えると寺田さんは四国霊場巡りに出かける。季節はあえて真夏の8月を選んだ。「お前も熱い思いをして亡くなったんやから自分も暑い真夏を選んで行く。辛い供養をする。それだけしかできないけれどとにかく許してほしい」と願いながら。

しかしやがて寺田さんは亡くなった娘と距離をとるようになる。自分を責め続ける苦しみに耐えられなくなったのだ。娘の死と向き合うことを避ける日々が10年にも及んだ。その間、娘の遺品もすべてしまいこんだ。「見たい反面、見たくない。見れば思い出す。思い出したら辛い。」そんな寺田さんの心境に変化が起きてきたのは震災から11年たってからのことだった。

テレビに、着る人がいなくなった着物を日傘に作り変える職人の話が映し出された。寺田さんは弘美さんの七五三のときに新調した着物のことを思い出した。寺田さんはこの着物を傘職人のところに送り日傘を作ってもらった。娘が気に入っていた扇の柄を生かしたあでやかな日傘が出来上がり、見ているとお宮参りの時、はしゃいでいた娘の姿が浮かんできた。「この着物を着てたときにこういうことああいうことあったんやと、いい思い出が前に出てくるようになった」そうだ。

日傘をきっかけに10年間変わらなかった娘との向き合い方も

変化して行った。今は公園になっている弘美さんが亡くなった場所、近寄りがたかったはずなのにそこに足しげく通うようになった。寺田さんはそこに弘美さんが好きだった椿を植えた。「亡くなった子は30歳で止まってしまったけど椿はこれから何年も何年も生き続けると思う」。寺田さんは

椿に手を合わせて弘美さんに「生きる決意」を伝えた。

◇◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

娘さんとの固く豊かな結びつきを思うと寺田さんの心の傷の深さは計り知れない。しかし、またそれが悲しみの仕事を成就させる力になったと思う。日傘職人の心のこもった仕事も欠かせなかった。10年という歳月もまた必然と思える。

